之云々とよめり、

〔古事記中應神〕吉野之國主等、贍大雀命之所佩御刀歌曰、〇略下

〔古事記傳三十三〕國主は白檮原宮〇神武段には、國巢と書り、書紀には國樔と書れ、後の書どもには、皆國栖と書り、然るに此に主字を書るは、めづらしく異ざまなり、

〔日本書紀三神武〕戊午年八月、天皇欲省吉野之地、乃從菟田穿邑親率輕兵巡幸焉、至吉野時、〇略中有尾而披磐石而出者、天皇問之曰、汝何人、對曰、臣是磐排別之子、排別此云飫時和句此則吉野國樔部始祖也、

〔新撰姓氏錄大和國神別〕國栖

出自石穗押別神也、神武天皇行幸吉野時、川上有遊人、于時天皇御覽、卽入穴、須臾又出遊、竊窺之喚問、答曰石穗押別神子也、爾時詔賜國栖名、然後孝德天皇御世、始賜名人、國栖意世古、次號世古二人、允恭天皇御世、乙未年中、七節進御贄、仕奉、神態至今不絕、

〔古事記傳三十三〕さて孝德の德字は誤ならむか、允恭天皇より先にあればなり、

〔日本書紀十應神〕十九年十月戊戌朔、幸吉野宮、時國樔人來朝之、因以醴酒獻于天皇、而歌之曰、伽辭能輔珥豫區周塢苑縣利、豫區周珥、伽綿蘆淤朋瀰枳、宇摩羅珥、枳虛之茂知塢勢、麻呂俄智、歌之旣訖、則打口以仰咲、今國樔獻土毛之日、歌訖卽擊口仰咲者、蓋上古之遺則也、夫國樔者、其爲人甚淳朴也、每取山菓食、亦煮蝦蟆爲上味、名曰毛瀰、其土自京東南之隔山而居、于吉野河上、峯嶮谷深、道路狹巇、故雖不遠於京、本希朝來、自此之後、屢參赴以獻土毛、其土毛者、栗菌及年魚之類焉、

〔類聚符宣抄七〕民部封戶所

勘大和國國栖丁十五烟事

右撿去天曆三年文薄、所注如件、但至于戶田者、引勘年々圖帳、無所見、仍勘申、

寛仁二年十一月十日　　少錄尾張如親